

はじめに

1990年10月3日、ドイツは統一された。本書は、ドイツの統一25周年を記念してまとめられたものである。とくに、統一と同時に姿を消したドイツ民主共和国（東ドイツ）について、その歴史（1949～1990年）を、「冷戦の起源」との関連から探っている。

ドイツは日本と同様に第二次世界大戦の敗戦国であった。日本の戦後は、「敗戦－占領」に出発点があったのに対し、ドイツでは、「敗戦－占領」と「冷戦－分断」の2つに出発点があった。アメリカによる占領政策が開始された日本に対して、戦後のドイツはアメリカ占領地区、イギリス占領地区、フランス占領地区、ソ連占領地区へと四分割されていた。四分割された占領行政へと「冷戦」が流れ込み、1949年に、西側（米英仏）占領地区はドイツ連邦共和国（西ドイツ）として、ソ連占領地区はドイツ民主共和国（東ドイツ）として、それぞれ成立した。そして、1955年に至るまでの過程において、西ドイツは超大国アメリカを中心とした西側システムへと、東ドイツは超大国ソ連を中心とした東側システムへと、強固に組み込まれた。それは、ドイツにおける「冷戦」が、「秩序」として確立する過程であった（「冷戦秩序」）。

西ドイツは資本主義を国家体制とし、東ドイツは社会主義を国家体制として、相互に国家の正統性をめぐる「体制競争」を開始した。ひとつのドイツ民族が2つの国家の成立を必要とする理由は、イデオロギーの相違（資本主義、社会主義）にあった。そのような東西ドイツの対立は、米ソ対立と連動し、1961年には「ベルリンの壁」が建設された。やがて「冷戦秩序」の制度疲労が見え始めた時、冷戦は終焉へと向かった。1989年11月9日、「ベルリンの壁」は崩壊し、1990年10月3日、東西ドイツは統一されたのである。

このようなドイツにおける大きな歴史の流れは、冷戦後の史料公開によって、細部における「再検討」が進んでいる。筆者なりにその傾向を分類すれば、次の6点を指摘することができよう。すなわち、第1に西ドイツの「アメリカ化」と東ドイツの「ソ連化」の実態について、第2に東ドイツにおけるドイツ労働運動の伝統と戦後のソ連型社会主義との関係について、第3にドイツにお

ける国際冷戦と国内冷戦との相互関係について、第4に西ドイツと「ヨーロッパ統合の起源」について、第5にソ連の戦後ドイツ政策の展開について、第6にナチス・ドイツに対する「過去の克服」について、である。

本書はこれらの「再検討」を念頭に、東ドイツにおける冷戦が「冷戦秩序」として確立するまでの1949～1955年の期間を分析した。この時期には、まだソ連の戦後政策に確定されていない部分があり、また東ドイツの発展方向も不明確であり（「社会主義か、統一か」）、冷戦とは別の「秩序」へと至る可能性が残されていた。それらのことは、1952年の「スターリン・ノート」（ソ連による東西ドイツの中立的統一提案）や、1953年6月17日事件（東ドイツ全土における蜂起）に象徴されており、本書がとくに注意した研究課題である。

また、1949～1955年の期間を説明するために、その前後の期間の分析についても、本書は取り組んでいる。とくにソ連占領地区における政治史、東ドイツの憲法制定過程、カードル・ノメンクラトゥーラ・システムの成立、プロテスタント教会の役割、である。さらに、東ドイツ研究の学問的位置づけを明確にするために、研究史の分析にも注意した。様々な研究者の分析・解釈を知ることが、冷戦、さらには東ドイツ史の理解に役立つのである。

東ドイツに対する関心は高い。しかし、東ドイツは、ドイツ史のなかにどのように位置づけられるのか？ 東ドイツは、ドイツの一部だったのか、それとも東ヨーロッパの一部だったのか？ そもそも社会主義とは何だったのか？ また、冷戦とは何だったのか？ これらの問題は思ったよりも難しい。本書は、東ドイツを分析する際に、なるべくドイツ史の流れ（時間軸）と、ヨーロッパ国際社会との関わり（空間軸）に注意して、東ドイツの位置づけを明確にすることを目指した。本書から、読者諸氏がひとつでも有意義な発見を得たとするならば、筆者としては望外の喜びである。